

● 全面教育 ●

主体的に取り組む児童・生徒をめざして ～学び合うチームみさと～

静岡県 浜松市立引佐北部小学校・中学校（校長 小川誠司）

- ① 9年間の学びの系統性・連続性を意識し、教員自らテーマを定めて「主体的に学び合うチーム」をめざし、児童・生徒と共に学び合う
- ② 児童・生徒が主体的に取り組みたくなるような手立ての工夫
- ③ 複式学級の運営と指導の充実に向けて

〔はじめに〕

本校は、浜松市浜名区引佐町の北部に位置し、愛知県との県境に近い山紫水明の自然環境に恵まれた農村地域である。また、伝統的な産業や文化などの教育資源が豊かな地域である。

平成 22 年 4 月に田沢小・渋川小・久留女木小の 3 小学校が統合し、引佐北部小学校が開校。平成 24 年には、引佐北部中学校が旧校舎から移転し、県内初の施設一体型小中一貫校として開校した。

開校 13 年目を迎え、令和 6 年度 4 月現在で、小学校 5 学級（3・4 年複式）、中学校 4 学級（知的特別支援学級 1 学級を含む）、児童 48 人、生徒 33 人が在籍している。

学校行事や学習の中では、異学年交流を通して学び合い、昼休みには、学年を越え

て小中の児童・生徒と一緒に遊び、関わりをもちながら過ごしている。

地域とのつながりも大切にしており、「ふるさと科」※ 1 の学習では、地域の方との交流を通じて、地域の自然や産業について学び、地域貢献への意識を高めている。



平成 24 年施設一体型小中一貫校開校（入学式）

※ 1 地域を活性化させるための学びを、地域と共同で行う、特別の教育課程

I 研究の概要

1 研究主題設定の理由

本校の学校教育目標は、「心豊かにたくましく生きる児童・生徒の育成」である。前年度、学校の理念である「みんなでつくる『みさと』※2の学校」を基に、「自分たちの学校は自分たちでつくる」という意識を向上させたいと考え、児童・生徒、全教職員や学校運営協議会が、それぞれに話し合いの場を作り、学校教育目標について検討した。次に、「心豊かに生きるとは」、「たくましく生きるとは」具体的にどのような姿なのかについて、本校の捉えをブロック（初等部・中等部・高等部）ごとに話し合い、全教職員で共有するとともに、学校運営協議会委員からも意見をいただいて、より具体的な目指す子供の姿を設定した。

本校の児童・生徒は、「素直で寛容な子供が多く、与えられた課題に真面目に取り組む、他者の異なる考えを受け入れながら学ぼうとする姿が見られる」というよさがある一方で、「仲間や教員の話に耳は傾けているものの、それに対して自分の考えを深めたり広げたりすることや、学びを自分事として捉えて粘り強く取り組み、次に生かそうとする場面は少ない」という課題を抱えている。そこで、「主体的に取り組む児童・生徒を育みたい」という全教職員の思いに至った。

子供の主体性を育むためには、各教科における授業、特別活動、部活動等のあらゆる教育活動において、教職員の意識を「指導」から「支援」へ変えていく必要がある。子供に本来備わっている可能性を引き出すことが大切であり、そのために子供に寄り添った支援を行うことで、子供が主体的に学んだり、行動したりするようになると考

えた。

学習指導要領総則には、「主体的な学び」を「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげること」とある。自分も他者も大切に、互いに認め合うとともに、各々に合った目標の達成に向けて、見通しをもって挑戦し続けることができる児童・生徒の育成を目指し、本年度の研究主題を「主体的に取り組む児童・生徒をめざして」と定めた。

2 校内研修の取組

「主体的に取り組む児童・生徒をめざして」のサブタイトルを「学び合うチームみさと」とした。教職員も自ら目標をもち、見通しをもって研修する「主体的に学び合うチーム」をめざして、小グループで研修を進めていく期間を設定した。基本的には、個人のテーマを定め、それを基に実践を進めるが、教科や校種に囚われない、4人程度の小グループを編成し、各グループで実践内容を検討したり振り返ったりする、P (Plan) → D (Do) → C (Check) → A (Action) のサイクルを繰り返して協働的に研修を進めていくこととした。教職員自らが多様な意見を取り入れながら研修を実践していくことは、子供たちの学びと共通するところであり、研修での学びが子供たちの学習、生活、行事等の教育活動に還元されていくと考えた。大人も子供も学び方を共有し、改善しながら学び続けていくことで、「学校全体で主体的に学び合うチーム」として取り組むこととした。

※2 田沢・渋川・久留女木地区を一つとして「みさと（三里）」と称している。

3 グランドデザイン

令和6年度 引佐北部小中学校グランドデザイン

【はままつの教育理念】「未来創造への人づくり」「市民協働による人づくり」
 【目指す子供の姿】○ 自分らしさを大切にできる子供
 ○ 夢を叶え続ける子供
 ○ これからの社会を生き抜くための資質・能力を育む子供

【学校の理念】みんなでつくる「みさと」の学校

【学校教育目標】心豊かにたくましく生きる児童・生徒の育成

	心豊かに生きるとは	たくましく生きるとは
本校の捉え	○ 自分も他人も大切にできる ○ 互いに認め合える ○ 互いに高め合える	○ 主体的に取り組む ○ 挑戦し続ける
高等部 8・9年	○ それぞれの人の思いや考えを認め合うことができる ○ 夢や目標の実現に向けて、互いに高め合うことができる	○ 自ら目標を立て、計画的に取り組むことができる ○ 夢や目標の実現に向けて、挑戦し続けることができる
中等部 5～7年	○ それぞれの人の思いや考えを受け入れることができる ○ 互いに良い点を取り入れて、高め合うことができる	○ 自ら目標を決めて、挑戦することができる ○ 困難に負けずに乗り越えようとする
初等部 1～4年	○ 自分や周りの人のよさを見つけることができる ○ 周りの人と協力し合うことができる	○ 自ら目標を持つことができる ○ 失敗を怖がらずに挑戦することができる
キャリア教育の視点	○ 人間関係形成・社会形成能力 ○ 自己管理能力・自己学習能力	○ 課題対応能力 ○ キャリアプランニング能力

令和6年度の学校運営の重点

- ① 児童・生徒の主体性の育成
 - 各教科授業、特別活動、部活動等、全ての教育活動を通して主体性を育む
 - 「自分たちの学校は自分たちでつくる」意識の向上
- ② 授業における個別最適な学び、協働的な学びの推進
 - 積極的なICTの活用、授業改善 → タブレット端末活用率の向上
 - ドリルパーク・ジャムボード等の活用、リモートによる他校等との連携
- ③ 複式学級の運営と指導上のための研修の推進
- ④ ふるさと科、国際コミュニケーション科の充実
 - 探究的な学習の推進、生徒主体による「模擬会社さきりやま」の運営
 - 外国語留学や他校との交流、日常の授業における表現活動の充実
- ⑤ 児童・生徒理解と個に応じた支援の充実
 - 発達段階、日常における共通理解
 - 就学支援委員会、発達支援教室の充実
- ⑥ いじめの未然防止（いじめを生まない環境づくり）と早期発見・組織対応
 - 人権教育、道徳教育の充実
 - 安心できる居場所（学校）づくり
 - 振り返りアンケート、いじめアンケートの普及実施と運用
 - 種別のないいじめ認知、組織的な早期対応（いじめ対策委員会）
- ⑦ 家庭学習、長期休業中の継続的学習の推進、保護者との共通理解
 - 主体的な学習、継続的な探究学習（社会、理科、ふるさと科等）の推進
 - タブレット端末を活用した学習（ドリルパーク、授業の予習等）の推進
- ⑧ 社会に開かれた教育課程の推進
 - 学校運営協議会との連携（基本方針の共有、教職員や児童生徒との協議）
 - 地域での学び・地域の方による学習支援の充実

心に沿って仮説を立て、研究を行うこととした。そして、研究成果が仮説と合致するかどうかを見通しながら実践を行うこととした。

3 小グループで協議する

研究を進めていく上での、教職員一人一人のもつ悩みや困り感をグループで共有することで、各自が研究の見通しをもちやすく、安心して研究が進められるよう、教職員一人一人が立てた仮説を基に、AI 機能を活用して、教科や校種に囚われない、4人程度の小グループを編成し、定期的に協議した。

4 自己調整しながら研究を進める

グループ協議や授業実践の記録を、スプレッドシートに記入することにより、自分の実践を振り返ったり、他の教職員の記録から学んだりしながら、研究の進捗状況や妥当性を客観的に判断し、自己調整しながら研究を進められるようにした。

Ⅱ 研究の方策

1 研究の方向性を明確にする

9年間の小中一貫教育を、学校全体で主体的に学び合うチームとして取り組むために、「めざす子供の姿」について教職員で話し合い、「自分に合った目標を立て、その達成に向けて、見通しをもって試行錯誤しながら挑戦し続ける子供」とした。そして、「めざす子供の姿」の実現に向け、個別に研究テーマ・研究の仮説を立て、授業実践を通して検証を行うこととした。

2 仮説を立てて検証する

仮説を立証できるかどうかを推考すること自体が、学びや改善のきっかけとなると考え、仮説を立てる際には、教職員が主体的に研究を進められるよう、一人一人の関

チームみさと 授業研究記録 授業者：

1. 研究主題
主体的に取り組む児童・生徒をめざして
～学び合うチームみさと～

2. めざす子供の姿
自分に合った目標を立て、その達成に向けて、見通しをもって試行錯誤しながら挑戦し続ける子供

3. チームみさと 個別の研究テーマ

4. テーマ設定の理由／研究のねらい

5. 研究の仮説

6. 実践の記録

月 日	内 容	振り返り

<研究の成果と課題のまとめ>

<グループ研究の記録>

個別の授業研究記録

Ⅲ 実践の内容

1 9年間の学びの系統性・連続性を意識した授業

中学校：音楽科

「きれいな歌声を自覚できる音楽科の授業づくり」（7～9年）

（1）テーマ設定の理由／研究のねらい

本校の児童・生徒は、「地声」と「歌声」を分けることが難しいという課題がある。小学校音楽科の学習活動でも歌唱に親しみ、浜松市の音楽研究発表会や卒業式の全校合唱等に向けて、合唱練習に取り組んできたが、少人数で声量が少ないため、大きな声で歌おうとしてしまう。周囲の声に耳を傾けながら「歌声」で歌う心地よさに気付かせたい。

（2）研究の仮説

「歌声」の本質を知り、「地声」と「歌声」の違いに気付くことで、声を出す楽しさだけでなく、曲を奏でる楽しさを知ることを通して、歌唱について探究していく気持ちが高まるだろう。

（3）活動内容

①「歌声」とはどのようなものなのか、というイメージを持たせるために、同じ中学生が歌う映像を見て、具体的な印象を持てるようにした。そして、自分たちが歌う様子を何度か録画し、その映像を比較して見ることを通して、どのような違いがあったのか、生徒たちの気付きを伝え合い、「歌声」について確認した。



動画から感じたことを共有し、本時につなげる

②歌うときに気を付けるポイントを生徒自身が明らかにし、呼吸や息の流れを意識しながら歌う習慣を身に付けられるように教員が助言した。そして、「歌う生徒」と「歌声を聴く生徒」を交替しながら、生徒同士が互いに助言し合った。



聴き合った感想から、改善点を見つける

③活動前後の全員合唱の映像を見て、聴き比べることにより、声の響きが豊かになったかを確認した。



全体で歌声の響きを確認しながら歌う

スプレッドシートによる実践記録

6、実践の記録

月 日	内 容	振り返り
6月24日	個別研究 交流会	中学生において研究を行うこととした。それぞれの学年の特徴を踏まえて、どのように研究を進めていくか、検討できた。
7月25日	校内研修& ICT研修	校内研修では、限られた時間で要点をどう押さえて主な活動に入るかを考え直す機会となった。普段は、ゆとりがあるように感じていたが、ポイントの押さえ方で、集中するところを絞ることができる。ICT研修では、なかなか実用できていなかったが、記録に残る形で交流やまとめを行うためのいろいろな方法を知ることができた。
8月30日	校内研修& ICT研修	校内研修の中で、改めてゴールを見据えて、いつ、何を発表して、自分の研究をまとめていくのかについて、詳しくしていくことができた。指導の際には、どこをポイントにしていくか考えたい。
9月2日	合唱授業 「心の瞳」	久しぶりにいろいろな人と一緒に歌うという場面になって、いつもよりも力を抜いて歌うことができていた。また、合唱音源を夏休み中に聴いていたこともあって、特に男子がよく響く声を出せていた。「いい声」のイメージづくりは、成功したように感じた。
9月30日	合唱授業 「心の瞳」	久しぶりの合唱練習になったため、音程が分からなくなる部分が出てきていた。新しい試みで、ピアノでの音取りを最小限にして、声で合っているかを確認すると、生徒自身から重なりを感じ取り、音程の高さのイメージを考える発言が見られた。
10月7日	合唱授業 「心の瞳」	発表するときに近い形で歌うことができた。いつもより自分のパートが多いこともあって、自信をもって歌うことができたのではないと思う。また、大きな声で歌うことができるようになったことで、それぞれの音の取りづらさが分かり、以前までは、きれいに整った歌ものどを使い過ぎて、力んだ歌声になってしまった。空気を循環するプレストレーニングと幅の広い跳躍がある発声練習を授業の中でも取り入れたい。

10月21日	合唱授業 「心の瞳」 (授業公開)	前回の動画から姿勢や楽譜の持ち方、統一したいことを確認できた。休み明けということもあって、正しい音程にはまらなかった。後は、本番に向けて最終調整していききたい。
10月25日	みさとパピ リオン	十分な声出しができないまま、迎えた本番になった。また、この1週間で練習に自主的に取り組む様子が見られた。
10月28日	歌唱テスト	本番でどんな歌が聞かせられたか、興味を持つ様子が見られた。また、1学期に行った歌唱のテストに比べると、正しい音の高さやきれいな声の出し方に関心をもち、自身の歌について評価ができるようになっていた。今回のパピリオンに向けた合唱への意識を卒業合唱につなげていきたい。

(4) 研究の成果と課題

- 胸式呼吸で歌ってしまうため、声量をコントロールすることが難しかったが、発声練習を行う前に、ストレッチを行うことで、体全体の力が抜けて、滑らかな声で歌うことにつながった。また、声を出すときの自身の体の様子を体感できるようになった。
- 発声練習では、口の中を広く保ち、空気をたくさんためながら歌う練習や、音のつながりに意識が向くように、音域を広げて練習したことで、喉が開きやすくなり、音程をイメージしながら歌うことができた。
- 男子生徒の中には、男性らしい声の出し方を追究し、女性パートとは違う響きを作ろうとする様子が見られた。
- 響きを合わせる際には、耳をどこに向けたらよいのか困惑する生徒も見られたが、練習を重ねていくうちに、聞き取れるようになり、他パートへの助言も見られた。
- 歌唱の探究については、個人差が見られた。個々の課題意識が明確になることで解決できるのではないかと考えた。

2 児童・生徒が主体的に取り組みたくなるような手立てを工夫した授業

小学校：保健（中学校の保健体育科教職員とのTT授業）

「児童が学んだことを実践に移し、健康に関するセルフケア能力を高めるための児童主体の授業づくり」

（1）テーマ設定の理由／研究のねらい

本校には、健康に関する基礎知識はあるが、実践に移そうとする児童が少なく、セルフケアをせずに保健室に来室する児童が多い。また、健康に関する課題を自分事としてとらえられていない現状がある。そこで、健康に関する課題を自分事として捉えて、児童主体で学ぶことのできる指導の工夫を行い、児童のセルフケア能力を高めたいと考えた。

（2）研究の仮説

一人一人が、身近な健康に関する課題について考え、課題を解決するための方法を学び合い、学んだことを実生活において、実践することで、生涯を通じて健康な生活を送るためのセルフケア能力を高めることができるだろう。また、保健指導や怪我の手当て（5年生保健）の授業を通して、身近な怪我の手当てについて学び、怪我をした際、自分で手当てをすることができるようになるだろう。

（3）活動内容

①各学年の身体測定の際に、自分でできる怪我の手当て（擦り傷・鼻血）について保健指導を行った（1～6年）。保健室に来室する前にできる自分の手当てについてクイズ形式で考えた後、それぞれの学年に合わせて正しい手当ての仕方を実践した。



校内の怪我の種類別件数と怪我の実態を知る

②保健の授業では、怪我の種類（擦り傷・切り傷・鼻血・やけど・打撲・ねんざ・つき指）の事例を挙げて、日常生活と関連付けながら、自分事として考えられるようにした。

③怪我が起きてしまった際に、どのようにすればよいのか、観察する視点や判断のポイントを伝えた。グループごとに、怪我の種類ごとに手当ての方法について考え、ミニ救急セットから必要な物を取り出し、実演しながら正しい手当てについて話し合った。そして、考えたことをホワイトボードにまとめた。



グループごとに、怪我の対応について考える

④グループごとに、考えた手当ての仕方を発表し、全体で怪我の種類ごとの手当ての仕方を確かめた。その後、各自で授業

の振り返りをワークシートに記入した。



グループで考えた手当ての仕方を発表する

(4) 成果と課題

- グループワークを通して、日常生活を振り返り、自分たちにもできる手当てについて考えることができていた。
- 怪我の事例を挙げたり、ミニ救急セットを用意したりして話し合いを進めたことで、子供たちが手当ての仕方をイメージして考えることができた。
- 保健指導後、自分でできる手当てをしてから来室する児童が増えた。高学年の児童の中には、低学年の児童に付き添って、低学年の児童でもできる手当てを教えている場面も見られた。
- 今後も、自分でできる手当てについて指導を続けていくが、怪我をしないためにはどのようにしたらよいのかについても子供たちに考えさせていきたい。委員会の活動として取り組むことも考えられる。

小学校：特別の教科 道徳

「子供たちが問いを持ち続け、主体的に問題解決していく授業づくり」～考えたくなる課題の設定や効果的な思考ツールの活用～

(1) テーマ設定の理由／研究のねらい

主体的に学ぶためには、学習に臨む児童が受け身ではなく「学びたい」「考えたい」と本気で取り組むことができる授業改善が必要である。そのためには「実物」「実演」「対話」を通して教材との出会いを大切に「あれ？どうしてだろう？」という「問い」からスタートすることが「思い・願い」を引き出す学習課題につながり「追究し続けられる問い」となると考えられる。また、課題解決に向かう学びの場において「どう考えたらいいのか分からない」「考えたことを筋道立てて書きまとめることができない」という児童に対し、適切な手立てが必要である。そこで、自分の頭の中で考えたことを図として表せる「思考ツール」の活用が考えられる。「思考ツール」によって、思考が可視化され、自分の考えが整理できる。そして、自分の思考を言語化し、自分の考えを相手に伝えたり、他者の考えに触れたりする場がよりよくもてるようになると考えられる。以上のことを実践することで、主体的に学ぶ児童の育成をしたい。

(2) 研究の仮説

教材との出会いを大切にし、子供たちの「問い」を引き出す課題設定の工夫をすれば、授業を通して問いを追究し続けられるであろう。また、学びの場において「思考ツール」を用いた授業を展開する中で、思考を可視化・整理することで、一人一人が問題解決の見通しを持ち、主体的に学習に取り組むことができるだろう。

(3) 活動内容

- ①自分の将来の夢や目標について考えることを通して、本時の課題をつかむ。



自分の将来の夢や目標について語り合う

- ②「スポーツの練習が大変で辛いときに、ガマンするのとガマンしないのは、どちらがいいのか。」という問いに対して、クラゲチャートに自分の考えを理由付けしながら書く。



クラゲチャートに自分の考えを書き、視覚化する

- ③バタフライチャートを用いて、付箋を貼りながら、主張の違う友達との話し合いを通して、自分の考えを高めたり、広げたりする。



バタフライチャートで多面的・多角的に思考する

- ④グループ交流の際に出てきた意見を全体の場で発表する。



各グループの意見を可視化する

- ⑤これから夢に向かって頑張っていく自分に手紙を書く。人生の先輩（芸人）のアドバイスを聞くことにより、高い目標を立て、希望と勇気を持ち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜こうとすることを自分事として考えられるようにする。



教職員の説話を聞く

(4) 成果と課題

- 子供たちの学習意欲の向上、主体的な学びをめざして、教材との出会いを工夫した結果、自分自身と向き合っている姿が見られた。
- 身近なことを取り上げて考えさせる場面を設定し、思考ツールの活用を試みた結果、違う考えを持つ子との交流で、多面的・多角的に考え、自己の考えを深めることにつながった。

- 今回の実践から、学習教科に合わせた思考ツールを選び、学習意欲の向上と主体的な学びにつなげていけるようにしたい。また、ICTを有効的に活用したい。

3 複式学級の運営と指導の充実に向けた授業実践

小学校：複式学級における共同研究

「本校における複式学級の主体的な授業づくり」～学習リーダーを軸にした、教科の特性を生かした協働的な学び～

(1) テーマ設定の理由／研究のねらい

本校では、3・4年生を複式学級として編制した教育活動を行っている。

現在、実施している「わたり」体制での授業は、算数科を主軸に行っているが、来年度以降は、他教科においても「わたり」や「合同」の体制で授業を進めていきたいと考えている。「合同」の体制では、単学級の学年別の授業同様に学びを進めていくことができる。しかし、「わたり」の体制では、一人の教員が指導する中で、直接指導と間接指導の学習活動が進んでいく。特に、間接指導の場においては、子供たちに授業の進行を任せることになる。子供たちが個々に一人学びを進めたり、仲間と考えを共有したりする場となる。

そこで、担当する教科（理科・社会科）の学習において、どの場面を直接指導とし、どの場面を間接指導とするのがよいか、2学年の直接指導と間接指導をどのように組み合わせるのがよいか、また、間接指導を児童の自力解決の場とし、充実したものにしていこうための手立てとして、一人学びの手引きや学習リーダーを取り入れ、どのように仕組んでいけば児童が主体的・協働的に学びを進めていけるのか追究することをねらいとした。

(2) 研究の仮説

複式学級での学習において、直接指導と間接指導の場面、2学年の直接指導と間接指導の組み合わせ方、一人学びの手引きの活用と、学習リーダーによる学びの進め方を工夫して行うことにより、子供たちは主体的・協働的に学習に取り組めるようになるであろう。

(3) 活動内容

教員の動きを可視化した指導案を作成し、授業実践を行った。

引佐北部小学校 3・4年 理科					授業者 平田 香織	
日時 令和6年 10月 7日(月) 5校時						
場所 引佐北部小学校 3・4年教室						
「主体的に取り組む児童・生徒をめざして」 本校における複式学級の主体的な授業づくり ～学習リーダーを軸にした、教科の特性を生かした協働的な学び～						
単元 3年「地面のようすと太陽」			4年「月と星の位置の変化」			
【本時の目標】 太陽の位置の変化について、知っていることを話し合 って月相による変化を予想し、確かめる方法を考える ことができる。(思考・判断・表現)			【本時の目標】 月と星の位置の変化について、知っていることを交流し合 って月相による変化を予想し、確かめる方法を考えること ができる。(思考・判断・表現)			
【主体的に取り組むための手立て】 ・太陽と月の共通点と相違点を3・4年生合同で話し合う場を設けることで、既習事項や生活経験と結び つけて予想したり、比較しながら予想したりすることができるようにする。 ・学年で話し合った予想を、3・4年生で互いに発表し合う活動を通して、上級生の学び方を参考にし たり、下級生にアドバイスしたりして、予想を確かめる方法を考える。						
【本時の授業デザイン】			直接指導		間接指導	
3年生			内容		4年生	
○太陽と月の共通点、相違点について話し合う。(合同)			課題把握		○太陽と月の共通点、相違点について話し合う。(合同)	
○めあてを確認する。(合同) 「太陽の見えるいちば、時間がたつとどう変わるのか調べよう。」			把握		○めあてを確認する。(合同) 「月の見える位置は、時間がたつとどう変わるのか調べよう。」	
○個々にノートに予想をまとめる。 ※事前に方位を全員で確認しておく。			予想		○学習リーダーを中心に、ノートに予想を書き、学年で話し合 って、ホワイトボードにまとめる。	
○学習リーダーを中心に、互いの予想を発表し合い、ホワイトボードにまとめる。 ○予想を確かめる実験方法を話し合う。			発表		○予想を確かめる実験方法を話し合う。	
○自分たちの予想と実験方法と比べながら、4年生の発表方法を聞き、感想を伝える。(合同)			予想交流		○月の見える位置の変化の仕方について、3年生に予想と実験方法を発表する。(合同)	
○太陽の見える位置の変化の仕方について、4年生に予想と実験方法を発表する。(合同)			発表		○3年生の予想と実験方法を聞き、アドバイスをする。(合同)	
○教科書p.116を学年で音読し、観察の見通しを持つ。(学年別)			共有		○教科書p.97を学年で音読し、観察の見通しを持つ。(学年別)	
生活経験をもとに太陽の位置の時刻による変化を予想し、確かめる方法を考え、説明することができる。(ノート・発表)					既習の太陽の学習や生活経験をもとに、月の位置の時刻による変化を予想し、確かめる方法を考えたり、3年生にアドバイスしたりすることができる。(ノート・発表)	

引佐北野小中学校 3・4年 社会				授業者 加藤 奈美江	
日時 令和6年11月 7日（水） 5校時 場所 引佐北野小中学校 3・4年教室					
『主体的に取り組む児童・生徒をめざして』 本校における複式学級の主体的な授業づくり ～学習リーダーを軸にした、教科の特性を生かした協働的な学び～					
単元 3年「災害からくらしを守る」		4年「ごみ処理と利用」			
【本時の目標】 4年生のアドバイスを基に、自分が知りたいことについて考えることができる。（思考・判断・表現）		【本時の目標】 ごみ処理について学習してきたことを新聞にまとめるために、3年生のアドバイスを生かして新聞作りについて考えることができる。（思考・判断・表現）			
【主体的に取り組むための手立て】 ・学年で話し合ったことをホワイトボードに書き、3・4年生で互いに伝え合う活動を通して、気になる意見について相手に質問する時間を設定する。 ・社会科と国語科の学びを横断的につなぐ。					
本時の授業デザイン		直接指導		間接指導	
3年生		内容	時間	内容	4年生
○めあてを確認する。（共同） 「自分の知りたいことについて、4年生のアドバイスをもとに考えよう。」	議題展開	0 5	議題展開	0 5	○めあてを確認する。（共同） 「新聞作りについて、3年生からアイデアをもらおう。」
○自分の知りたいことを、付箋に書く。	個別	10	個別	10	○自分の知りたいことを、付箋に書く。
○学習リーダーを中心に、考えをホワイトボードにまとめる。（記名をして誰の意見なのかを分かるようにする。）	グループ	25	グループ	25	○学習リーダーを中心に、考えをホワイトボードにまとめる。（記名をして誰の意見なのかを分かるようにする。）
○学年でまとめた考えについて、4年生に答えてもらう。（疑問に思ったことは、適宜質問する。）	交流	35	交流	35	○学年でまとめた考えについて、3年生に答えてもらう。（疑問に思ったことは、適宜質問する。）
○自分の知りたいことについて、個別に質問する。（前半：質問⇔後半：応答）	交流	41	交流	41	○自分の知りたいことについて、個別に質問する。（前半：質問⇔後半：応答）
○自分が見たいポイントについて、考えをまとめる。	個別	44	個別	44	○自分の考えをまとめ、新聞作りのイメージをもつ。
○本時の学習を振り返る。	合同	45	合同	45	○本時の学習を振り返る。
○4年生のアドバイスを基に、自分が知りたいことについて考えることができたか。（社会科学習ノート・付箋）		○3年生のアドバイスを基に、新聞作りについて考えることができたか。（社会科学習ノート・付箋）			

(4) 成果と課題

- 学習内容につながりをもたせられると、上学年にとっても下学年にとっても、新たな学びが生まれて効果的であった。
- 単元ごとの学習の見通しを子供たちと共有しておけば、学習リーダーが主体的に授業を進めていた。リーダーが困ったときには、他の子に相談したり教員に質問したりすることが自然に身に付いていた。
- 3年生の質問に、生き生きと答える4年生の姿から、非認知能力の高まりを感じた。また、下級生を相手に1年前の学習事項について振り返ることは、上級生にとっても意義ある学びになった。
- 社会科では、単元にこだわることなく、複式学級での授業が可能と考える。
- 2学年の直接指導と間接指導の組み合わせ方については、今回のように直接指導の時間帯をずらして組む必要がある。2学年の授業を表す指導案形式の活用が望ましい。

- 学年によっては、学習リーダーが苦手な児童もいて、子供の実態に合った進め方を考える必要がある。
- 理科では、天候等に左右されがちな単元内容が非常に多く、単元内容をうまく組み合わせ合わせて授業を行うのは、とても難しいことが分かった。
- 社会科では、主体的・協働的な学びに重点を置いたため、本来の教科としての目標達成が曖昧になってしまった。

4 終わりに

「学校全体で主体的に学び合うチームみさと」として研究実践を進めることで、協働的に研修を進めることができたと感じる。教職員を対象として行った研修後の振り返りアンケートでは「研修主題が、児童・生徒、教職員に合っている」と答えた教職員は85.5%、個別研修の満足度は94%と高い数値であった。このことから、今年度の実践を通して学びの多い研修になったと考える。

しかしながら、上記のような課題点（●で示した点）も見られることから、今後も研鑽を積み、大人も子供も共に学び合うチームとして進めていきたい。子供たちの笑顔のために。



南校舎と本校のアイドル「きりやまさるくん」

(研修主任：加藤奈美江)